座談会 2017

現代版「仲間入り」

浜口順子
田島大輔
杉浦真紀子
中村智美

仲間入りと先生の介入

中村　昔の座談会（この後の14～17ページに一部転載）を読んで、子どもの姿は変わらないんだなあ、と笑ってしまったのは、「及川先生の組、椅子一つ、足りないんぢやない？僕の方にこれだけ一つセイが高いの」と椅子を持ってくる子の話。幼稚園でそういう子がいたな、と思い出しました。遊びをあまり夢中にできていないんだなあとか、そういうことが気になって私も見ていました。

杉浦　気になっちゃうんですね。

中村　先生たちの気になる子って今も昔も変わらないのだと思いました。やっぱりどこか友達と楽しく遊んでほしいという願望、願いが保育者にはあるのだなと。

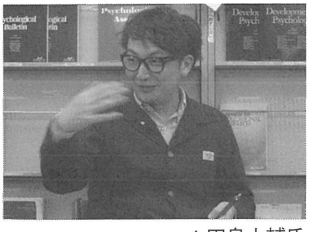
ただ、昔の座談会では、どんどん遊びに誘ってやらないと、とか、促しをもっと心がけます、といったことが書いてあったので、そうしてもいいんだろうかと……。

杉浦　私もそこは驚いた部分というか。結構、「……してさしあげましょう」ということが言われていますね。どういうふうにこの先生たちはしていくのだろう、と興味深いです。

浜口　先生が介入するか否かの問い方がちょっと、現代と雰囲気が違うようですね。子どもの姿もちょっと違うような……。今でもいますか？　大人ぶって、対等に他の子どもを見ていないような子どもは。そういうのはよろしくないと倉橋は言っていますが。

浜口順子（お茶の水女子大学教授）
杉浦真紀子（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）
田島大輔（文京区立お茶の水女子大学こども園保育士）
中村智美（大和郷幼稚園元教諭）

田島　まあ、まれにいるという感じはします。時代も違うし、この座談会の舞台になっている東京女子高等師範学校附属幼稚園に来ている子どもの家庭環境との違いなどもありますけれど。そういう気質なのか、仲間といっても、入れるか抜けるかみたいな話ではなくて、それをさらに俯瞰的に見ようとするタイプの子。特に入園当初などによく見るような気がしますね。



▲田島大輔氏

浜口　田島先生は、「入ろう」と積極的に介入するほうですか。

田島　私はあんまり言わない。まず子どもを見て、この子はなんでそう言うのか、と考えたり、まあ見てましょう、というところから入りますかね。それは時代性なのでしょうか。

浜口　逆に、やっぱり「入ろう」とか積極的に働きかけて、かえってよかったということはありますか。

田島　私は男性だから、援助するというよりも周りとの調整を図ったほうがうまくいくような気がしています。園の保育者は子どもたちにとっては、やはり「お母さん」的じゃないですか。だから男性というだけで異質性があるので、援助するよりも調整をするほうが多かったりします。でも、私が勝手に「入れない子」というイメージで見ていただけで、ちょっと促せば「なんだ、入れたんだ」ということが意外とあったりもします。

浜口　男性保育者っていうのはそういう意味では、少し思い切った感じというか、女性の保育者とは違う声掛けをしても、子どもにとっては自然だというようなことがあるのかもしれない。ご自分ではそんなに意識していないのですか。

田島　今はあんまりないのですが。若い頃は

もう少し意識して、肩に力が入ってしまうこともあったんですけど、だんだん抜けてくると、男女で何が違うかというより、みんな違うのだと。そうなると、男性だからなのか初任者だからなのか、あまり頭で考えてしまうと、意外と声がかけられないこともある。普通のことが言えなくなって、自分が「仲間に入れない子」みたいになっちゃってるとか、そういう可能性もあると思います。

雰囲気が変わるとき

杉浦　昨年八月、「ライフ×アート展」をしましたよね。附属小学校・中学校の図工の先生と、こども園や附属幼稚園・ナーサリーの保育者が一堂に会して創ったアートのイベント。全身でいろいろなものを感じ、身体を動かして作品を作ったり、日頃の保育や授業の様子を造形的に表現して展示したりしました。幼稚園は夏休みでしたが、こども園の子どもたちは保育の一環でライフ×アート展に遊びに来ていて、そこで身体を動かすようなワークショップが始まるところだったんです。

その時、こども園の三歳の子、P君が一人、幼稚園の展示スペース（「畑」を表現した場所）に座り込んでいました。P君は、こども園の子どもたちがワークショップの方に向かうような中で、みんなと一緒には行けないぞ、という感じだった。私はP君とその時初めて会ったんですけど、幼稚園の「畑」にあるひしゃく（表現した畑なので水もないのですが）をずっと握りしめていたので、私もなんとなくひしゃくを持って水をかけるふりをしたら、それが面白かったのか、そのうちに「よっよっ」とか言いながらP君も水をかける動きを始めて。

▲杉浦真紀子氏

そのうち、私もやっぱり誘導しちゃうんですね、P君を。その面白い動きをしながら、ふわーっとみんなの楽しい動きの所に寄っていった。するとP君は、そのままみんなの中にいて、ひしゃくで独特の動きをすることを楽しんでいた。ひしゃくというモノを介して、動きが生まれて、その子が面白いと思える雰囲気や場がある……。そこから周りと感じあうことが始まった。

田島　あの時は、ライフ×アート展自体がオープンな空間なので、こども園の人たちはそこで自由に遊んでいた。その中で「身体でアート」という動きが出てきて、皆集まってきた。そこへ彼も誘ったほうがいいのかと私は迷っていた。けれど、近くにいた関係ない人がかかわってきてくれたことによって、仲間に入る―入らないの次元とは別の雰囲気になった。杉浦先生が来て、解放的な人が来たなあという感じでした。

杉浦　変だったよね。（笑）

田島　その次の日も同じ会場に行ったのですが、P君、杉浦先生に「ひしゃく、ひしゃく」って言って、よく覚えてました。

浜口　外部の先生だから、かえって気楽に。

杉浦　そうそう。

中村　年中のクラス替えで、私が初めて担任になったQ君という子がいました。環境が変わって全然保育室から出て来なくなってしまい、部屋の中で一人静かに絵本を読んだりはするんですけど、他の子どもが外に行ってもそこから動かないし、私に話しかけてきたと思ったら、「トイレにつながる廊下の電気が暗くなっていて怖い」って言ったり。表情もずっと硬くて、とても不安なんだなと思い、いろいろ私なりに「外で〇〇しようと思うんだけど行く?」とか、近くで彼が興味を持ちそうなことをやったりしていたのですが、彼の姿はあまり変わりませんでした。

でも、ある時、とてもいい表情をしているQ君と園庭で出会って、「え！　どうしたんだろう」と思ったら、主任の先生が育てていたサヤエンドウを収穫していたんですね。見たこともない笑顔で、しかも保育室から外に出てる！　と驚きました。その主任の先生は特に強く働きかけたわけではなくて、もちろん気にはかけていらしたんですが、ちょっと声をかけたら、「やる」と本人が言って、やったそうなんです。初めはQ君以外にはもう一人ぐらい、特に親しくもない子どもが一緒にやっていたのですが、そこからQ君の動きがすごく変わって、まだまだ硬さはありつつも、園庭の他の収穫物をちょっと見に行ったり、水やりをしたり、他の子どもとのかかわりも少しずつ出てきたり。主任の先生の働きかけもありましたが、彼にとっては、サヤエンドウっていうモノが他の人たちとつながっていくきっかけになったのだと思います。

▲中村智美氏

浜口　モノとか、第三者とか、子どもと環境との関係枠を変えたり緩めたりするきっかけがあると、子どもが動きやすくなるということもあるのでしょうね。

一人でいる子ども

中村　倉橋先生の「社会的生活を求める要求度が違ふんですね。独りでは淋しい人と、淋しくない人がある。食ひしんぼうと食欲のない人があるようにね。」という言葉、すごく響いてます。

杉浦　一人で全然平気、っていう人には出会ったことがないかなあと思っているんですけど、どうなんでしょうね。私たちは、子どもたちが自分で何かを見つけてやっていくということをすごく大事に思っているから、保育

の中でたまたま一日ずーっと根を詰めてやっていたら誰とも接することがなかった、ということはあるのかもしれないけれど。

浜口　座談会の昭和初期の時代は、保育内容が遊戯・唱歌・観察・談話・手技という五つの項目から考えられていて、お遊戯を一斉に踊ったり、手技に一人でみっちり取り組む時間が保障されていたという言い方もできると思います。だから、自由遊戯（遊び）のときに一人でいる子どもがいると、社会性を育てる経験が不足するという危機感が働いて、せっかく幼稚園にいるのになぜ他の子とかかわらないのか、かかわれないのかと問題視される傾向が強かったとは言えるのでしょう。

田島　友達と仲間になるのがゴールではないというか、ついつい「五歳になったら」とか、「幼稚園が終わるまでには五〜六人の仲間が」とか言ってしまうのはちょっと違う気がする。「協同的な」とはよく見聞きする言葉だけれども、先生が考えた協同的な枠に入り込みたいのか、それとも本当につながろうとしているのかは、全然違う。

浜口　そもそも仲間入りって何のため？　仲間って何なのでしょうね。

田島　ある意味、園に来ているというだけで、仲間といえば仲間と言えますものね。

浜口　集まっている、という意味でね。

一緒にやりたくない、と否定すること

田島　こども園で三歳児クラスの担任をしていて、「散歩行かない？」と聞くと、「行きたくない」と言われることがある。「行かないよー」って、何人かが決まって。本当に行きたくないのかわからないんですけど、まず自分の意思があって否定から入ることも大事なんじゃないか。「いやだ、はだめでしょ」と言うのではなくて、「そうなの、行きたくないの、どうしよっかな」と、まず相手の懐に入って

共感的なところからかかわることでお互いに調整していこうとすることが面白いような気がします。結果よりもそこが重要なのかもしれない。

浜口　それは子どもにとって？

田島　子どもにも、保育者にもあるかなと。

浜口　ずるずると、行きたくないのに行く子どももいるかも。

田島　以前は幼稚園に勤めていたので、散歩に行くという文化が僕の中になかったんです。

浜口　こども園で働くようになって、散歩は新しいテーマなんですね。

田島　そういうときってどうしたらいいんだろう、と考えるのも面白かったですね。ＮＯと言われたときに、この人にはＮＯと言う何かがあるんだろうなと思うし。大きな園庭のある園だと、ＮＯと言われても（なんとかなるので）どうぞ、ってなるだろうし、お互い葛藤する場で考えるきっかけになる。

浜口　散歩に行くというのは、一斉的な集団行動とも言えますが、仲間入りとはどういう関係にあるのでしょうか。

役割をシェアしながら仲間に入る

杉浦　年長の最後の時期に、投げゴマがとてもはやったんですよ。一人一個ずつ持っているのですが、Ｘ君はいつまでも引き出しにしまっていて、やらない。何かにつけてちょっと自信がないとやらないって人で……。

　投げゴマも半分くらいの人ができるようになってきた頃、クラスでコマ大会をやろうということになった。全員参加ではなくて、ハイハイって名乗りをあげた人がやる。他にも対戦表を書く人や、その場を仕切る司会者みたいな人も出てきました。その大会が始まってからＸ君はどんどんその場から身を引いていって、部屋の隅にある積み木に上って、「僕は回せないし」とか言いながらいじけている。

そこで「やってごらん」と言ったらますますへそを曲げて、今度は部屋の外に出ていってしまうかもしれない……コマを回せなくてもこの雰囲気の中で彼の居場所がなんとかできないかと見守っていて、ある時、「今日は司会を頼んだ！」と声をかけてみた。子どもたちも「声がおっきいし、司会がいいんじゃない？」と言って。そうしたらX君、「ハイ、始めます！」「僕の所に来てください」と、司会をてきぱきやり始めました。

でも今度は、今までコマを回していた人たちが司会をやりたがって、三日目にしてX君は司会の座を奪われてしまった。で、いじけちゃうかなって見ていたら、そこからがすごくて、引き出しから自分のコマを出してきて、練習を始めたんですよ。二、三日して、やっと回った。もうあと何日かで卒業式という頃。「X君、そろそろコマバトル、出られそうなの？」って聞いたら、「あと一日」って言って。残念ながら大会には出場できなかった。でもみんながやっている傍らで、自分のコマが回るか、試すことができたんですね。それを見て周りの女の子たちが「X君、回ってよかったね」と言っていた。こういうふうに少しずつみんなとの一体感を感じて、チャレンジできたんじゃないかなと思います。

田島　仲間関係と言えるかわからないですが、私の組に、コマ回しが始まるとアナウンサー役を、鬼ごっこでは応援役をやる人がいます。

浜口　傍観者ではないのね？

田島　違うんですよ。雪が降ったときも、みんなで雪が降ったって騒いでいる横で、気象アナウンサーをやり始めて、何なんだろうこの子は、と思った。雪が降ると普通、みんな外に出るじゃないですか。それなのにその子は「雪が降っています」ってやるんです。四歳になったばかりなんですけど。

杉浦　なんかでも、ここでこういう事をして

ほしいなあというときに「やらない」とか言われると、「じゃあ、せめて見てて」と、よく言いますよね。運動会などで「やらなくてもいいけど、遠くから見てて」とか。いきなり一緒にやらなくても、せめて雰囲気を感じていてほしいから。でも、子どものほうは、こうして先に、「見てます」って言ってくる。こちらが思う以上に感じているんですね。

田島　すごいですよね。「見てて」と保育者が言う前に、もうすでに子どものほうから「僕、警備」みたいな。私は笑いながら、「絶対、警備いらないでしょ」って思うんですけど。

浜口　いろんな役割の人が社会をうまく回しているということを、なんかこう、子どもの直感でわかっているようで面白いですね。でも、大人から見ると、真ん中にいないと参加できていないようで心配したり。

杉浦　担任の先生はついそうなりがちよね。

田島　昔の座談会の最後に、倉橋先生が、人間としての関係生活を考えれば、いい悪いの価値づけは神様の仕事であって、我々の仕事は子どもの関係位置を考えてやることだ、と言われていますが、広い感じがする。仲間関係って言いながらも広さも語るという。

浜口　子ども自身がすっと入れる関係位置を探って、子どもから動く。

田島　大人もそうですよね。保育室の入り方とか。私のこども園は仕切りがなくオープンだから、どこら辺にいれば落ち着くとかありますよね。

浜口　中心といっても真ん中とは限らなくて。なんか深い話になってきた予感がしますが、今日はこの辺で。（笑）

（二〇一七年四月二十四日）